

2023年7月9日（日）主日朝礼拝説教

『神はわれらと共にいます』 井上隆晶牧師
ヨシュア記1章5～9節、ヨハネ福音書8章1～11節

①【神が沈黙される意味】

イエス様が朝早くから神殿の境内で教えておられた時のことです。そこへ律法学者やファリサイ派の人たちが、姦通の現場で捕まった女の人を連れて来て、真ん中に立たせ、イエス様に言いました。「先生、この女は姦通をしている時に捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。…あなたはどうお考えになりますか。」(4～5節) 朝から何と騒々しく、気分が嫌になる出来事でしょう。姦通の罪は聖書では石打の刑という死罪でした(申命記22:20～21)。しかしこれはイエス様を訴えるための罠でした。イエス様が「赦せ」と言えば、律法を破ったとして訴えることが出来ます。「殺せ」と言ったら、罪人の友というのは嘘であるといって群集をイエス様から引き離すことができます。どちらを答えても不利でした。しかしイエス様は屈みこんで黙ったまま、指で地面に何かを書き始められました。この不思議な行動は一体私たちに何を教えているのでしょうか。

「神の目は罪を見るにはあまりにも清い」という言葉を聴いたことがあります。「お前たちが手を広げて祈っても私は目を覆う」(イザヤ1:15)とあるように、見ない、聞かないのは神の配慮です。太陽をまともに見て目の潰れない者がいるでしょうか。神が何かを語れば耳が鳴り、それは最後の審判になるでしょう。だから神は沈黙をされ口を開かれません。最も正しい方の前で自分の正しさを主張する人間とは一体何者なのでしょう。神の沈黙があるうちに回心しなければなりません。

②【人は誰も人を裁くことは出来ない】

しかし彼らがしつこく問い続けるので、主は身を起こし「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」(7節)と言われました。そしてまた、身を屈めて地面に書き続けられました。これを聞いた者は、年上の者から始まって、一人また一人とその場を立ち去り、女の人とイエス様だけになりました。石を投げるのは年長者からと決まっていたから、年長者が誰もいなくなれば誰も石を投げないのです。

●年上の者から去ったのは、歳を取るといことは罪もたくさん犯して来たということなのです。旧約外典の終わりにマナセ王の祈りが載っています。彼はこう祈りました。「わたしの犯した罪は海辺の砂より多く、とがは増しました。主よ、増し加わりました。」(マナセの祈り9節) 4世紀のアレキサンドリアのアタナシウスは「神の像として創造された理性的な人間は消し去られ続けてゆき、神の作

品は破壊され続けていった」と書いています。墮落とは過去の一回だけを指すのではなく、どんどん壊れて行く状態を指しています。それは分かると思います。一度罪を犯すと、罪を犯すことに慣れ、平気になります。アルコール依存がそうです。同じ量では酔えなくなるのでますますアルコールの量が増えてゆきます。罪は「雪だるま」のようなものです。雪だるまを作る時、小さい雪の固まりを作り、それを転がすと自然に雪がついて、どんどんその雪玉は大きくなります。それと同じように、人は長生きするほど罪を重ねます。増える事はあっても減る事はありません。罪で重くなるので、放っておいたら人間はどんどん落ちてゆきます。神以外に誰が人間を引き上げることができるでしょう。

イエス様は身を起こし「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかったのか」と聞くと、彼女は「主よ、誰も」と答えます。人間はみな罪がありますから、同じ人間を裁ける人は誰もいないのです。この世の裁判は完全ではありません。冤罪もありますし、時代によって判断も変わります。この世の裁判は「必要悪」です。そこに完全を求めたり、大きな期待をしてはいけません。だからこそ神による最後の審判が用意されているのです。私を裁けるものは人間の内では誰もいません。それは罪のないイエス・キリストだけです。そのイエス様が婦人に言われます。「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。」(11節)これは全ての人に言われているのです。この言葉を「罪を犯しても裁かれないから、何をしてもいいのだ!」というように聞いてはなりません。それはコリント教会に現れた異端のグループでした。神を恐れず、キリストの犠牲を踏みにじることです。罪がないと言われたのではなく「罪に定めない」と言われたのです。「罪があるけれども有罪としない」という意味です。何と驚くべきことでしょう。唯一、人を裁ける方が「私もあなたを罪に定めない」と言われるのです。なぜでしょうか?それはあなたの罪をキリストが負われるからです。だからあなたは釈放されるのです。キリストがいなければ「あなたは有罪」とされます。

②【キリストは罪人から去らないという神秘を福音という】

私たちは罪を犯すと、神との間に(人間も同じ)距離が生まれます。良心が私を訴えるので「私は本当に赦されるだろうか、私は愛されるだろうか、神は私と共にいてくれるだろうか、見捨てられるのではないか」という恐怖心が生じるからです。良心は神が創られた物なので悪くないのですが、罪を教えるだけで、私たちを救うことは出来ません。そこで人間の方から神に近づくことができないので、神の方から人に近づかれたのです。それがキリストの降誕です。神は天から地に降り、人となって罪人の間に住まわれました。天使が人に現れる時必ず「恐れるな」というのはそういう訳です。そのような神を聖書は「インマヌエル」と呼びました。「神はわれらと共におられる」という意味です。ヨシュアに向かって、神は「わたしは…あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。

強く、雄々しくあれ。」(ヨシュア1:5)と言われました。神が共にいるから勇気を出せと言うのです。私たちはこの言葉を自分に言われた言葉として聞かねばなりません。ヨシュアは立派だったから神は共におられたが、私には共におられないと思ってもなりません。

みんな神を誤解しており、聖書を間違っ読んでいます。「神は清い人とだけ共にいてくれる」と思っています。違います。罪を犯しても神はあなたから去らないのです。姦通の現場で捕まった女からイエス様は去りましたか？去りませんでした。多くの方は去りましたが、イエス様だけは去りませんでした。そこに神が共におられる「神秘」が隠されています。それこそが「福音」なのです。洗濯物はどうしたらきれいになりますか？水が汚れた洗濯物と触れ合うから、汚れが水に転嫁するのです。水がなければ、いくら洗濯機で洗濯物を回しても汚れは落ちません。罪人と共にいると、横にいる人は傷つきます。だから人は罪人から離れます。しかしキリストは罪人から離れません。共にいてくださいます。それが十字架です。だからあなたは清くなれるのです。神は罪人と共におられ、罪人から去りません。こんな簡単なことが分からず、神を恐れるとは、ああ、何と悪魔の嘘が入ってしまっていることでしょう。聖書を読めば、それは一目瞭然です。人生の初めから終わりまで、主はいつも罪人と共にいてくださいました。

●4世紀のアウグスティヌスはこんなことを書いています。「われわれは悪人たちの中で忍耐をもって生きなければならない。なぜなら、われわれが悪人であった時、善人たちがわれわれの中で忍耐をもって生きてくれたからである。われわれがかつてどんな人間であったかを忘れないなら、悪人たちを忍耐することができるのである。もし、あなたが今善人なら、悪人たちにあなたが通った道を用意してやるべきではないのか。」

私は神学校に入る時、英語のテストが落第点でした。面接でR. スナイダー先生に「君は英語ができませんね」と言われました。それでも合格しました。憐れんで入れてもらったのです。ロイヤルホテルで結婚式をする時、聖歌隊はオーディションがありましたが、私はありませんでした。憐れんで仕事をさせてもらったのです。私の周りに「私を憐れんでくれる人」を神様はいつも置いて下さいました。その人たちの愛と忍耐によって今の私があるのです。自分の罪を忘れてはならないと思います。何があっても私と共にいてくださるキリストに驚きます。あの方は約束を守っておられるのです。真に誠実な方です。私が救われるとしたら、ただあの方が約束を守って下さったからです。この「神は罪人と共におられる」という福音の神秘にひれ伏し、感謝したいと思います。